朝日新聞の役立つ会員サービス
aspara アスパラクラブ
朝日新聞 本紙購読ご案内 Onlineで手続き カード決済・口座振替 配達先変更
キーワード 対象コミュニティー 全て サイト内検索
ホーム ネクストエージ ウオーク&ラン ブック トラベル カルチャー シネマ スポーツ 共育 aサロン 医療・健康 be 新聞navi エトセトラ プレミアム
コミュニティーTOP
会員ID(メールアドレス)
パスワード
ログイン
パスワードを忘れた方
aspara会員登録
アスパラクラブとは

あなたも趣味人

指編みから広がる輪

冬支度の季節になった。初めて編み物に挑戦する人に最適なのが、針や棒を使わず、指だけで編む「指編み」だ。「ぼけ防止にいい」との評判が広まり、1990年代後半から広まった。教本に頼らなくても、マフラーなら数時間で完成。針や棒で人を傷つける恐れがなく、電車内や喫茶店、病院の待合室などでも編める。メリヤス編み、アフガン編み、こま編みなど多彩な編み方が可能だが、もっとも簡単なのは、あやとりのように両手で編むリリアン編み。編み上がった筒状のひもをつなげたり広げたりして、マフラーやぬいぐるみを作り上げる。

埼玉県川越市のシニア男性サークル「男のゆうゆう塾」は今年1月、地元在住の講師・豊田知枝子さん(61)を囲み、公民館でリリアン編みの指編み講座を開いた。費用は毛糸代など500円。「毛糸にさわるのも初めて」という20人弱が集まり、2時間でマフラーを1本仕上げた。

豊田さんの説明を受ける「男のゆうゆう塾」のメンバー。受講者は色とりどりの毛糸の中から好みのものを選び、自分だけのオリジナル作品を完成させた＝「男のゆうゆう塾」提供(右写真も)

毛糸を選ぶことでマフラーにも風合いが生まれ、おしゃれな雰囲気に

20年以上の講師歴を誇る豊田さんだが、男性ばかりのグループを教えるのは初めて。何を教えようかと迷った末、毛糸さえ用意すればできる、独学で覚えた指編みが浮かんだという。「みなさん素直に受け入れてくださって、教える方も楽しかった。格安の費用で暖かくなって帰られてよかった」と豊田さん。塾代表の斉藤誠さん(67)は「初心者でもできるとは驚き。1人で黙々と編むのではなく、互いに助け合うことができた」と講座を振り返る。

老人ホームや中学校でも

独自の技法「ゆびあみ」を考案し、ブームの火付け役となった創作ニットデザイナーの篠原くにこさんによれば、発案のきっかけは「ゆうゆう塾」同様、男性限定の教室をカルチャーセンターで受け持ったことだったという。

「みなさん仕事がお忙しいので、欠席しがち。月に2回の教室のうち、1回が出張で出られないとなると、やり方を忘れてしまい、次回はまた1からやり直すことになります。作品を仕上げる達成感を味わえないまま講座を終え、編み物から遠ざかってしまう」

また、難解な記号が並ぶテキストも大きな壁だった。何とか「解読」して2本の針や棒を操っても、「いま、なぜこの動作を行っているか」が分からない。その点、自分の指を使って編めば、毛糸が編みあがるメカニズムを体感しやすい。初心者の

アスパラ写真館

『何の実？』
今日のお手軽・かんたんレシピ

『カマンベールチーズケーキ』
おすすめ
ゆるゆる紀行　日田にひたって
津波試算、危機感なく
往診してくれる在宅医を探せ
RSウイルス感染症が流行中だね？…
向井千秋さん(宇宙飛行士)
中学受験の失敗が尾を引いて
10/16 12:46 更新
asahi.com ニュース
マラソン大会で23人救急搬送、熱中症か　東京(22:51)
「今夏程度の節電続ける」86%　朝日新聞世論調査(22:45)

編み物へのとば口として最適だと考えた。

篠原くにこさん。手に持っているのは、代表を務めるNPO法人「日本指編み協会」が被災地に送るために用意したマフラー

「ゆびあみ」で作った作品。アイディア次第でさまざまな表情が生まれる

それが「ゆびあみ」の入門書を出版したところ、趣味の領域を超えた広がりをみせていった。目の不自由な人でも編める簡易さ、脳を刺激になるといった理由から、老人ホームや病院でも教材として使われるようになったのだ。

こうした要望に応え、篠原さんはNPO法人「日本指編み協会」を立ち上げ、老人福祉施設や障害者施設、中学校などで指導を行うようになった。今秋は関東各地にある東日本大震災の避難施設にも出張。ここでも参加者同士が助け合い、マフラーを仕上げる。目下、協会では中学生や老人福祉施設の入居者らの協力を得て1000本の指編みマフラーを仕上げ、被災地へ送る計画を進めている。

活動に参加してきた1人、東京都の近藤喜久さん（74）が編み物を始めたのは60代に入ってから。「子育ても一段落し、一人ぼっちで世間様から置いて行かれちゃう」とカルチャースクールで受講したのが、いままで続いている。その間に舅（しゅうと）、姑（しゅうとめ）の介護をして見送り、自身も何度もの大病を経験してきた。「いま私が健康でいられるには編み物のおかげ」と話す。

近藤喜久さん。自ら「ゆびあみ」で編んだ帽子とチョッキを着て

「ゆびあみ」はこうして始める。近藤さん（左）と古賀和子さんに実演してもらった

一心に編んでいるとストレスも忘れる。夫妻で経営する物販店の仕事の合間など、寝る時間を惜しみ、編む。「根気があると、主人も驚くほど」。また、人に教えることでも「もらうもの」が多いという。「ここの編み方が分からない」と、店先や地元の公民館に近藤さんを尋ねてくる人にアドバイスすると、ブローチなどをプレゼントされることもある。「向上心のある人には、こちらも元気づけられます」と近藤さん。

いま、近藤さんの一番の気がかりは、一緒に編み物のお稽古をしていた女性のことだ。昨年9月、福島県白河市に引っ越した。震災直後は連絡もつかず、近藤さんも不安が募るあまり「パジャマに着替えないで寝た」。「こんなときに編み物なんかしていていいのだろうか」と思うが、編まずにはいられない。やがて電話で話せるようになり、手紙のやりとりが再開す

鎮魂と復興願い舟走る　台風被害の熊野川で御船祭（22:09）
コンテンツ一覧
ご利用方法
携帯サービスについて
ページの先頭へ

るうち、大変な状況が分かってきた。道路には人影もなく、洗濯物も外に干せない、マスクをして歩く……。でも、白河市へは気安く行かれる距離ではない。

こんな思いが、近藤さんをボランティアに駆り立てている。

話し合い、助け合いながら

10月2日、篠原さんは協会のボランティアらと一緒に、福島県双葉町の人たちが避難している埼玉県加須市の旧騎西高校を訪れた。集会室には告知をみて集まった約20人の姿があった。ほとんどが女性。同じ部屋の人同士などで机を囲み、せっせと指を動かす。

「初体験というのはおもしろいよ。こうしていると、放射能も原発も忘れちまう」

「今度の一時帰宅のときは、これを巻いて行こう」

「帰りたいなあ」

男性ボランティアの励ましに、受講者からも笑顔が。毛糸玉の下に敷かれた新聞は、福島の地元紙だった

ぽつん、ぽつんと言葉が出てくる。独り言のようにつぶやいたり、隣の人に同意を求めたり。手が自由に動かない人、立ち往生している人の手もとを、仕上げた人がのぞき込む。ボランティアはそんな様子を見守り、声をかけられれば輪に加わって、手を添える。

華やかな笑顔を振りまき、周囲に話しかけていた江又トミさん（80）の家は福島第一原発から3・5キロの距離にあった。家は津波に流されずに済んだが、3月12日に家を出て以来、要介護の夫とは離ればなれに。途中、夫がどこへ行ったか行方が分からなくなり、ようやく福島市内の介護老人保健施設にいるのを探し当てた。この日までに2回訪問。江又さんが行くと夫は元気になり、話せはしないものの「うん」とうなずくことはできるという。双葉町の家に帰れたのは、6月11日、津波に流された人の慰霊が行われた日だけ。自宅の前まで行ってはみたものの、「何もかにもがひっくり返っていて、びっくりして中に入ることができなかった」。

自分のマフラーを仕上げ、他の人を手伝う江又トミさん（右）。旧駒西高校で開かれた「ゆびあみ」講座の参加者も、こうして時間内に全員がマフラーを仕上げた

そんなつらい経験も、江又さんはしんみりすることなく語る。「震災から6カ月が過ぎ、ようやく何かやってみようか、駒西に来た記念に形あるものを残したいと思っていたところ。だから、今日は楽しかった」と、マフラーを首に巻いた。

指編みはひところのブームも一段落し、いま、カルチャーセンターではヨガやダンスなどに押され気味だという。セーターもマフラーも毛糸代にも満たない価格で買えるようになり、形勢不利は拭えない。が、篠原さんは根気強く「ゆびあみ」をとば口に、編み物を広めていこうと考えている。

「編み物はストレス解消にもなるし、創作の喜びは何物にも代え難いものがあります。プレゼントをするにも、安く買ったものにはない価値を人にあげることができます」

都心にもひっそりと癒やしの場

決して華やかさはないが、編み物には人の心を和らげる不思議な力があるようだ。東京都内にはいくつかの「編み物カフェ」があり、編み物好きの憩いの場となっている。

東京都新宿区にある「森のこぶた」は、その一つ。2008年5月、テレビ制作会社のディレクターをしていた喜多見理恵さん（50）が始めた。

asparaは、セキュリティ確保のため、個人情報の入力時にはSSL暗号化技術を使用しています。
asparaに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。
Copyright 2011 The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.

編み物カフェ「森のこぶた」で。元同僚の2人は、この日、2年ぶりに会ったという。「編み物カフェに行きたいね、って前から話してたんです」

「森のこぶた」のオーナー喜多見理恵さん。店内には好きなものばかりを並べ、落ち着ける空間を作り上げた

不景気のあおりを受けて会社の仕事は減り、解散。さてどうしようかと思ったとき、編み物がぞんぶんに楽しめるカフェの開業を思いついた。編み物は学生時代から好きで、就職してからも作品を編み上げてはコンテストに応募するなどしていた。職場では上司やクライアントに気を使い、帰りは毎日終電。そんな中でも編み物だけは続けていた。

「もしかしたら、私も編み物に癒やされていたのかもしれません」

と、会社員時代を振り返る喜多見さん。店は隠れ家のような場所にあり、編み物好きばかりだけでなく、近所に住むおじいさんや幼稚園の送迎をするお母さんたちのお客も多いという。 そんななか、遠方から足を運ぶ編み物ファンたちは、決してはしゃぐことなく、たんたんと手を動かす。作品を持ち込む喜多見さんに質問する人、友人同士、おしゃべりしながら手を動かす人……。「1人で編むより、楽しいから」 取材中、店内に居合わせた女性客の1人はぽつりと言った。静かな店内には街中とは違う、ゆったりとした時間が流れていた。

≪ フラダンス 「見た目」から若返り | 記事一覧

バックナンバー一覧

関連記事

- やってみたいボランティア ［be］
- ☆人脈記☆ 「がん その先へ」筆者ブログ（9） がんでも遊びたい ［アピタル］
- 《東日本大震災》支え合う力を活かす社会へ ［アピタル］
- 【東日本大震災】 こども未来基金を立ち上げました ［aサロン（記者ブログ）］
- 【376回】 《東日本大震災》 70歳代のボランティアさん ［アピタル］